

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：32693

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26893295

研究課題名(和文)助産師を取り巻く権力構造 授乳支援に焦点を当てて

研究課題名(英文)The Power Structure Surrounding Midwives: Focusing on breastfeeding support

研究代表者

濱田 真由美 (HAMADA, Mayumi)

日本赤十字看護大学・看護学部・助教

研究者番号：30458096

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：助産師から授乳支援を受ける側である母親の母乳育児にまつわる体験をメタ・サマリーによって網羅的に明らかにし、権力構造を探究する手がかりとした。

Effect sizesが20%以上であったテゴリーは以下の通りであった：母親は子どもの反応や行動、授乳に関する知識・技術の未熟さから授乳や搾乳に困難を感じていた(30%)、母親は直接授乳によって母親になったという実感や覚悟、価値づけをし、満足感や有能感を感じていたが、一方で母乳分泌不足の場合は自責の念を感じていた(25%)、母親は母乳育児や搾乳に伴う生活スタイルの変化や身体の不調、疼痛、子どもの啼泣に身体的・精神的苦痛を感じていた(20%)。

研究成果の概要(英文)：This study used a meta-summary of qualitative research findings to exhaustively clarify experiences involving breastfeeding of mothers who are on the receiving side of breastfeeding support from a midwife.

The following categories with the effect size of 20% or more were identified. Mothers felt: 1) difficulties in feeding and pumping due to inadequate knowledge/skills regarding the baby's reactions, behaviors, and feeding (30%); 2) satisfied and being capable by embracing motherhood as well as being determined to be a mother and valuing the state through direct breastfeeding, while feeling guilty when lactation was not sufficient (25%); and 3) physical and mental suffering due to the change of life style caused by breastfeeding and pumping, ill-health, pain, and the baby's crying (20%).

研究分野：母性看護学・助産学

キーワード：母乳育児 授乳支援 母親 体験

## 1. 研究開始当初の背景

(1) これまで日本では、母子にメリットがあると言われていた母乳育児を推進する研究が多くなされてきたが、母乳育児支援に携わる助産師がどのような権力構造のなかでケアを提供しているのかに目を向けたものはない。近年、少子化や核家族化がすすむなか、育児の負担を一手に背負う母親にとって、母乳育児を推進する助産師の授乳支援は、育児ノイローゼや産後うつを予防するどころか、悪化させる要因として捉えられ、危機感をもつ母親も少なくない(濱田, 2012)。したがって、助産師がどのような権力構造のなかで母乳育児支援に携わっているのかを明らかにすることは、授乳支援における情報に基づく意思決定を見直し、現代社会の母親たちに合った授乳支援のあり方を医療システムや社会的観点から新たに再考する取り組みである。

(2) 母乳育児支援を担う助産師にとって、授乳する母親の喜びや大変さは自らの授乳支援を見つめ直す契機になっている(濱田, 2013, pp. 46-51)が、母親を支援することは、助産師にとって必ずしも容易なことではない、とも告白されている(濱田, pp. 51-55)。したがって、権力やイデオロギーが潜在する授乳支援について、そのあり方を検討するためには、まず母乳育児をおこなう母親の体験を網羅的に明らかにすることが急務であると考える。

## 2. 研究の目的

本研究は、助産師がどのような権力構造のなかで授乳支援を行っているのかを探究するため、まず授乳支援を受ける側にいる母親の体験を網羅的に説明することを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究デザイン

質的研究のメタ・サマリー (Sandelowski & Barroso, 2007)

### (2) 対象文献

2000年から2015年の間に日本で発表された文献で、以下の選定基準をすべて満たす40文献とした：研究デザインが質的研究である、産後の女性が対象である、倫理的に問題がない、研究結果がデータによって支持されている論文である。

### (3) データ収集方法

医中誌 Web (Ver.5)、CiNii、メディカルオンライン、Google scholar を使用し、検索語に「母乳育児」「人工栄養」「授乳」「母親」「質的研究」「体験」「経験」「関わり」を組み合わせて検索した。

### (4) データ分析方法

対象文献の結果から母乳育児にまつわる産後の母親の体験を抽出、抽出した体験の類似性と相違性に注目しながら分類しカテゴリー化、最終的に導き出されたカテゴリーを支持する文献数が、全対象文献数に対し

て占める割合を算出する (Effect sizes)。なお、本研究は、所属大学の研究倫理審査委員会において審査の必要がないと判断された (No.2015-93)。

## 4. 研究成果

### (1) 結果

#### 対象とした一次研究の概要

対象文献の第一著者は看護学 (39 件)、社会学 (1 件) であった。対象文献の研究参加者は1名から103名、延べ588名の母親であり、その内訳は、初産婦 (12 件)、初産婦および経産婦 (12 件)、早産児をもつ母親 (5 件)、双子をもつ母親 (4 件)、高齢初産婦 (2 件)、HTLV-1 抗体陽性の母親 (1 件)、初産婦と助産師 (1 件)、初産婦と実母 (1 件)、混合栄養と完全人工栄養の母親 (1 件)、不明 (1 件) であった。

#### 母乳育児にまつわる母親の体験

対象文献40件から、10のトピックと57のカテゴリーが導き出された。母乳育児にまつわる母親の体験は、医療者に望むケア、家族・実母・ピアサポーターに望む支援、概して、否定的な体験、子どもとの関係、母親としてのアイデンティティ、価値の獲得、授乳の能力・技術の獲得、困難との対峙・努力・乗り越え、母乳育児または人工乳を選択する動機、母乳育児のプロセス、離乳や断乳への思い、に分類された。以下、トピックごとに導き出されたカテゴリーについて記述する。

#### 医療者に望むケア

1. 母親は入院中に専門家から受けた授乳方法の直接的で頻会な指導や保証的な言動を自分たちに役立つ援助として受け止めた
2. 母親は、母児同室により、母子のエントリーメントの促進や授乳リズムが確立し、授乳への満足感が高まった
3. 母親は退院後、専門家から技術的、精神的支援を受ける場があることが、母乳育児を継続するうえで重要であると考えていた
4. 母親はアトピー性皮膚炎と食事、母乳の関連性や回復への道筋を明確に示す母乳相談室 (助産師) を通じてエンパワーされていた
5. 母親は、専門家から受けた授乳支援や精神的支援の不十分さから、授乳に関する選択が狭められたり、戸惑ったりした
6. HTLV-1 抗体陽性者が子どもに母乳を与えるか否かをめぐり専門家間で見解の相違があるなかで母親は戸惑いつつも、母親自身の選択を尊重してほしいと願っていた

#### 家族・実母・ピアサポーターに望む支援

7. 母親 (早産児を出産した母親を含む) はピア支援によって共感や励まし、情報を得て、頑張りや問題解決につなげていた
8. 母親は、家族から受けた精神的支援、身体的支援を、母乳育児をおこなう自身にとって役立つ援助であると受け止めた

9. HTLV-1 抗体陽性である母親にとって、母乳を与えるという選択は1人で担うには重過ぎるため、家族、特に夫が賛成してくれたことで責任を分かち合う安心感を得ることができ、母乳哺育という決断ができたと感じていた

10. 母親にとって、夫の母乳にこだわらない態度や母乳育児の大変さを気遣う関わりは、母乳育児を行う上で支えとなる精神的支援であった

11. 母親は母乳育児経験のある実母や義母から受けた安心できる助言や対応、授乳の手伝いを役立つ援助として受け止めていた

12. 母親は母乳育児を行う上で家族の協力不足、無神経な発言、価値の押し付け、思いやりのない態度にストレスを感じていた

13. 母親は夫が父親になりきれしていないと感じていた

#### 概して、否定的な体験

14. 母親は母乳育児や搾乳に伴う生活スタイルの変化や身体の不調、疼痛、子どもの啼泣に身体的・精神的苦痛を感じていた。

15. 双子の母親は、前回(単胎)の出産や育児、授乳方法の違いにより否定的な感情を抱いていた

16. 母親は子どもの反応や行動、授乳に関する知識・技術の未熟さから授乳や搾乳に困難を感じていた

17. 早産児を出産した母親は搾乳することに疲労し、やめたいという思いとやらねばならないという意識との間で葛藤していた

18. 里帰りした母親は自宅に戻る際、授乳するための新たな環境を整える必要性を感じていた

19. 初産婦は子どもにとって必要な存在になることや医療者の判断に基づいて母親の価値を査定することは、「自然で母親らしい母乳育児」と異なっていた

#### 子どもとの関係

20. 母親は母乳育児や搾乳は母親である自分にしかできないことであり、子どもにとって自分は必要な存在だという児との繋がりを自覚していた

21. 母親はスキンシップがとれ、長時間一緒に過ごす母乳育児は子どもへの愛情や子どもとの関係が深まると捉えていた

22. 母親は、母乳育児を通して支配するかされるかといった緊張感のある関係性を児に感じていた

#### 母親としてのアイデンティティ、価値の獲得

23. 母親は直接授乳によって母親になったという実感や覚悟、価値づけをし、満足感や有能感を感じていたが、一方で母乳分泌不足の場合は自責の念を感じていた

24. 母親は子どもの欲求に応じて授乳できないことに対して罪悪感や葛藤を抱いていた

25. 早産児を出産した母親は児に対する後ろめたさや罪悪感を搾乳することで埋め合わせようとしていた

#### 授乳の能力・技術の獲得

26. 母親は小さい子どもとの生活体験不足、数値や支援者への依存、自身の身体的な回復に囚われている場合、母親は子どもの様子それ自体から子どものニーズを読み取ることができなかった

27. 母親は体験や経験から得た母乳育児の知識と自信を母乳育児継続の力としていた

28. 母親は子どもとの応答の繰り返しや時間を共有することによって、子どもの反応を読み取ることができるようになった

29. 授乳中は子どもと結びつきながらも、母親は自分の時間を楽しむことができるようになった

30. 母親は失敗を避けたり、問題を解決するために、支援者にアドバイスを求めたり、周囲の人から助言を得たり、本やインターネットで調べたりしていた

31. 母親は子どもの吸着を視覚的もしくは非視覚的に判断することによって授乳を評価していた

32. 母親は子どもに多くの母乳を飲ませようとしていた

#### 困難との対峙・努力・乗り越え

33. 早産児を出産した母親は直接授乳することや子どもに母乳を与えるという目標を達成するために、搾乳し母乳分泌の維持に努めていた

34. 初産婦である母親は分娩後に疲労がありながらも授乳能力獲得しようと努めていた。母親は葛藤を乗り越えたり、努力をし続けることによって次の段階へ進んでいた

35. 母親は今までの授乳/搾乳体験を振り返り、困難を乗り越えたことに価値を感じていた

36. 母親は楽で効果的な搾乳手技を見つけ出そうと工夫したり、母乳分泌促進のための努力をしていた

37. HTLV-1 抗体陽性の母親は、直接母乳による児への感染の可能性に関して、将来の子どもとの関係性も考えたうえで、出産のたびに母乳育児の決断に迫られていた

#### 母乳育児または人工乳を選択する動機

38. 母親は母乳のメリットや自然であること、母親の務め、女性としての理想を理由に母乳育児や搾乳を希望していた

39. 母親は母乳育児を大事に考え、継続したいと思っていた

40. HTLV-1 抗体陽性の母親は子どもが「未熟児」であるということを利用して母乳育児を選択していた

41. 母親は過去に果たせなかった母乳育児を今回は実施したいという思いを強くしていた

42. 喫煙や内服をしていた母親は母乳育児を中止することを決めていた

43. 母親は身体的・精神的疲労、自己防衛、母乳育児への関心や要求の欠如、母乳分泌不足感、他者の言動によって母乳育児から遠ざかっていった

#### 母乳育児のプロセス

44. 早産児を出産した母親は、児への自責の念や呼吸状態の不安定さに不安を抱きながらも、子どもの生を守るために唯一できる搾乳に取り組み、直接授乳できるようになると身体感覚を通して母親になった実感と児への愛情が高まっていた

45. 早産児を出産した母親は、児への自責の念や呼吸状態の不安定さに不安を抱きながらも、子どもの生を守るために唯一できる搾乳に取り組み、直接授乳できるようになると身体感覚を通して母親になった実感と児への愛情が高まっていた

46. Late Preterm 児を出産した母親は入院中に普通の子どものと何か違うと感じつつ、よくわからないまま育児し、退院後には直接授乳できない困難さに直面するが、退院から産後1か月の間に繰り返し授乳に取り組んだり、家族や助産師のサポートを得ることで、子どもの様子を理解し、授乳を確立していった

47. カンガルーケアを行う母親は子どもが乳房を探し吸啜する過程を通して児や母乳育児に対する肯定的評価が生じたが、吸啜までに時間がかかった場合は否定的な感情が芽生えた；嬉しさ、児の生命力、母親の実感、母乳育児への自信、自分への褒美、期待外れ

48. 母親は母乳育児が古来より行われている自然のことだと考えているため、授乳を重ねて母乳育児を確立することで母乳の良さや子どもの愛おしさ、母親としての自信を感じていたが、母乳が足りない時には罪悪感や母親失格の感覚を抱いていた

49. 初産婦である母親は授乳を通じた子どもとのやり取りから、試行錯誤しながら体験を重ね、授乳パターンを確立していった

50. 帝王切開で出産した高齢初産の母親は、母乳育児に予想以上の身体的負担を感じたが、助産師の助言でポジティブに発想の転換ができ、自分にできることからやろうと自律する覚悟が芽生えた

51. 双子を出産した母親は授乳方法を模索する時期を経て、2児の成長や個性を感じ、授乳方法を獲得していった

52. 直接授乳が困難で保護器を用いて母乳育児を行っていた母親は、保護器使用によりもたらされた安堵感や満たされなさなど相反した思いを感じながらも、周囲からの支えによって保護器を離脱でき、直接授乳を通してはじめて母親になれた実感を得ていた

#### 離乳や断乳への思い

母親は断乳開始前、断乳のタイミングや方法

53. について考えたり迷ったりしていた

54. 断乳ケアを受けた母親は、断乳による子どもや乳房の変化に戸惑ったり、授乳できなくなることや母乳外来に通院する必要がなくなることにアンビバレントな気持ちを抱いたが、子どもの変化や次子を予定することによって断乳に対する気持ちに折り合いを付けていた

55. 断乳した母親は月経の再来を心配したり、乳房が栄養を与えるものから女性を象徴するものへと意識が変化した

56. 母親ははじめて授乳したときから、卒乳後に生じ得る母乳を与えることができなくなる寂しさを予期していた

57. 双子を出産した母親は、アンビバレントな感情を抱きつつも、周囲の言動の影響を受けながら、2児の特徴を実感することによって離乳を進めていた

また、57 カテゴリーのうち、Effect sizes が20%以上であったテゴリーは以下の通りであった： 母親は子どもの反応や行動、授乳に関する知識・技術の未熟さから授乳や搾乳に困難を感じていた(30%)。 母親は直接授乳によって母親になったという実感や覚悟、価値づけをし、満足感や有能感を感じていたが、一方で母乳分泌不足の場合は自責の念を感じていた(25%)。 母親は母乳育児や搾乳に伴う生活スタイルの変化や身体の不調、疼痛、子どもの啼泣に身体的・精神的苦痛を感じていた(20%)。

#### (2) 考察

母親にとって母乳育児にまつわる体験は、困難さや身体的・精神的苦痛を伴うものであり、母乳育児が成功するかしないかによって母親のアイデンティティや価値が揺るがされることが示された。産後の母親を支えるためには、母親が体験する母乳育児の否定的な側面を考慮に入れた医療者による保証的な関わりや育児経験者からの安心できる助言や対応が求められていることが示唆された。一方で、母乳育児に関する研究は多いものの、母親の体験を論文として発表している文献に限ると40件と少なく、授乳する母親の体験が網羅的に明らか委されているとは言い難い状況にあることが示された。また、一次研究の結果は、解釈レベルに達するまで十分に分析がなされていない場合も多く、国内における質的研究のクオリティにも課題がある状況が伺えた。

#### <引用文献>

濱田真由美、初妊婦の授乳への意思に影響を与える社会規範、日本助産学会、26巻1号、2012、28-39

濱田真由美(2013). 授乳支援をおこなう助産師の経験(未発表の博士論文). 日本赤十字看護大学大学院看護学研究科, 東京.

Sandelowski, M., & Barroso, J. (2007). Handbook for synthesizing qualitative research. NY: Springer.

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

濱田真由美、佐々木美喜、鈴木健太、住谷ゆかり、仁昌寺貴子、母乳育児にまつわる母親の体験、日本看護科学学会、2016年12月10日または11日、東京国際フォーラム(東京都千代田区)

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

濱田 真由美 (HAMADA, Mayumi)  
日本赤十字看護大学・看護学部看護学科・助教  
研究者番号：30458096

### (2)研究協力者

佐々木 美喜 (SASAKI, Miki)  
城西国際大学・看護学部看護学科・准教授

鈴木 健太 (SUZUKI, Kenta)  
NPO 法人えがおさんさん・訪問看護ステーションさんさん

住谷 ゆかり (SUMIYA, Yukari)  
日本赤十字看護大学・看護学部看護学科・講師

仁昌寺 貴子 (NISHOJI, Atsuko)  
筑波大学・人間総合科学研究科看護科学専攻・博士後期課程